

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.66

令和6年4月1日

転禍為福

新しい時代へ



会長 馬場 洋一

令和6年も早や四分の一が過ぎ、春爛漫を迎えています。今年、元日に能登半島地震というなんとも悲惨なスタートとなりました。犠牲者のご冥福を祈りし、鎮魂の祈りを捧げたく存じます。しかし顧みれば、戦後復興の槌音が高く響く頃に大先輩たちが立ち上げた横浜能楽連盟です。「転禍為福（禍を転じて福と為す）」の心意気で、前に向かって進めるものと信じています。

令和6年、元日に能登半島地震というなんとも悲惨なスタートとなりました。犠牲者のご冥福を祈りし、鎮魂の祈りを捧げたく存じます。しかし顧みれば、戦後復興の槌音が高く響く頃に大先輩たちが立ち上げた横浜能楽連盟です。「転禍為福（禍を転じて福と為す）」の心意気で、前に向かって進めるものと信じています。

横濱能楽連盟にも、大きな動きがありました。ホームグラウンドである横濱能楽堂が大規模改修工事により2年半の休館に入りました。けれど、ここでも転禍為福です。代替会場として横濱市磯子区民センターを利用できることになったのです。幼い美空ひばりがデビューした劇場にちなみ、「杉田劇場」の愛称を持つ劇場です。能舞台以外の大会開催は横濱能楽堂誕生以来のことで、ある意味「大事件」でした。劇場側と打ち合わせを重ね、何とか実施することができましたが、横濱能楽堂のありがたさを再認識した次第でもあります。

さて、私事ではありますが、今年度4月の総会をもって会長を退任することとなりました。平成26（2014）年に藤本圭佑前会長の後を継いでから10年になります。「幽玄」に掲載された拙稿は18回にも上りました。我慢してお読みいただき感謝に堪えません。

就任時と変わっていない状況は「高齢化」です。故新堀豊彦元会長も退任に際して「高齢化による会員減は深刻な問題である」というお言葉を残されています。この問題は永遠のテーマのように思いますので、反省を込めてここで振り返ります。

この10年間を見ると、事情は流派により様々でした。高齢化により解散せざるを得なかった会がある一方、新たな会員を増やして大きくなった会もありました。しかし会員数の減少を食い止める増加数は得られず、連盟全体では漸減しています。

☆お知らせ☆

◎「第40回横濱五流能楽大会」

10月12日（土）開催予定（担当流派・金剛流）
会場 杉田劇場（横濱市磯子区民文化センター）
・入場無料

五流各団体により、素謡・仕舞などが演じられます。各流派が同一曲を演じる五流競演もあります。

◎「第28回五流交流のつどい」

令和7年3月15日（土）開催予定（担当流派・宝生流）
会場 杉田劇場（横濱市磯子区民文化センター）
・入場無料

五流各団体により、素謡・仕舞などが演じられます。学生による特別招待出演もあります。

*会場予約の都合上、日程は変更される場合があります。

第26回

「五流交流のつどい」報告

担当流派・観世流梅若会 桑原 弥兵衛

令和5年3月18日(土)、横浜能楽堂本舞台において、横浜能楽連盟主催、横浜文化観光局共催、横浜能楽堂後援を得て、「五流交流のつどい」が開催されました。

出演番数は40番(演目別番組数は素謡12、連吟5、仕舞22、独吟1)、延べ出演者数は259名(実参加者数177名)でした。

また、特別招待出演として、國學院大學・金春会の学生さん達にお願いし、仕舞3番(竹生



鳥・芦刈・葛城)を舞っていたいただきました。今回の学生出演にあたって、いくつかの大学へ電話で出演依頼をしましたが、コロナ禍のため各大学が休部または減員などしており、なかなか出演してくださるところがなく心配いたしました。やっと國學院大學から出演していただくのと返事をもらい、本当によかったと思います。

今回の大会は、コロナウイルス感染症の影響によって実に4年ぶりの開催となりました。感

染予防のためマスク着用や消毒に留意しつつ、初めてマスク使用で舞台出演することになったことは少々気がかりではありましたが、無事終了してホッといたしました。

当番幹事流派としては、スタッフの数が少なかったこともあり、他流派の方々いろいろな

第39回

「横浜五流能楽大会」報告

担当流派・観世流 尾崎 純子

お手伝いいただき、とても感謝しております。

この4年間、コロナ禍により停滞していた横浜能楽連盟の活動が、ようやく再開されましたので、これからも、活発に前に進んでいかなければならないと思います。

令和5年10月14日(土)、「第39回五流能楽大会」が横浜能楽堂において開催されました。同年5月8日にコロナが感染症としてインフルエンザと同じ5類になり、3年余にわたった厳しい感染症対策から、少し解放されたような明るさを覚える開幕でした。

出演者延べ人数は242名、総番数30番、大会恒例の五流競演曲は「野宮」でした。今回の当番流派は観世流。その取りまとめ責任者である私にとっては初めての大会準備でしたので、計画から実行までの7か月間は、とても緊張をいたしました。幸いここ数年、大会マニュアルを事務局が作ってくだ

り、3年余にわたった厳しい感染症対策から、少し解放されたような明るさを覚える開幕でした。

ることができました。そして、これだけの大規模の会となると実に多くの会員のご協力を賜っていることを、改めて知りました。また大会には多くの方が足を運んでくださり、最後まで観覧していただけたのも、大変嬉しいことでした。皆様、本当にありがとうございます。

私個人の感想を言えば、今まで大会は部分的に参加していたに過ぎませんでしたが、今回は全容に触れ、五流派の大会ならので面白さを十分味わうことができました。謡いや舞い方はもちろん、流派によって曲名や作法にも違いがあつて、興味深かったのと同時に、共通しているのは、能楽を楽しみ研鑽する姿であることも感じました。

さつていましたので、その順序やフォームに従って丁寧に準備を進めましたところ、私のような未経験者でも何とかその任を果たすことができました。まず、このマニュアル作成をされた先輩諸氏の知恵と努力の積み重ねに深く敬意を覚える次第です。

ただしこのマニュアルはパソコン操作が必須で、便利ではありませんが、IT世代ではない七十代の私にとっては試行錯誤の連続で、決して楽ではなかった面もあります。しかし効率は大変良く、能楽連盟も新時代を迎えてIT化に対応せざるを得ない時期に来たと痛感しました。

当日は、観世流3社中がお互い協力し合ったので、運営もスムーズに、大過なく楽しく終え



お互いを知ること視野が広がり、自分の会、自分の流派にとどまらない世界がグンと広がった気がいたしました。

高齢化による能楽愛好家の減少は、コロナ禍で一層拍車をかけた感否めません。それだけに、五流が一緒になって何とか伝統芸能である能楽の魅力を未



趣味としての謡曲

観世流 奥山 俊一

来に引き継いでいってほしいと願わずにいられませんでした。横浜能楽堂は令和6年1月から2年半の改修工事に入るのでこの大会は、言わば「改修前の横浜能楽堂サヨナラ大会」とも言える会となり、一層感慨深く幕を閉じました。

昨年の夏、友人からの依頼を受けて富山社交倶楽部で講演する機会を得た。せっかくの小旅行でもあり、県立美術館で開催中の棟方志功展に立ち寄った。棟方は青森県に生まれ、後半生は妻女の出身地の富山に住んだ。棟方の生家は青森の善知鳥神社の近くで、ある時、能楽者からお能「善知鳥」について聞き、その仕舞を見た。その幽玄の世界に感動し、自宅に帰り墨汁をベースに「善知鳥」を29場、31点の版面に描いた。

私は今、目下売れっ子の作家原田マハが書いた「板上に咲く」(MUNAKATA・Beyond Van Gogh)を、渡辺えりのナレーションでアマゾン・オーディオで聞いている。またNHKの2024年大河ドラマ「光る君へ」は、紫式

部の源氏物語にまつわる平安期の日本の貴族社会が描かれている。室町時代に観阿弥・世阿弥により完成された能は、シェイクスピアや西洋のオペラより、総合古典芸術としては歴史が古い。

さて、私は学生時代から金融市場で働くならロンドンのシティと決め込み、ユーロ市場が勃興しつつあったロンドンに、70年代、80年代、90年代と三度

にわたり通算20年あまり勤務した。当時痛感したのは、日本人である限り、日本の歴史・文化・風土をよく知っておき、世界の人々と語り合うことの大切さだった。退職間際には、歌舞伎や人形浄瑠璃、古典落語にはまり、国立劇場等ではしばしば観劇した。また近くにある日本棋院にも通い、日本文化の原点でもある囲碁を初歩から学んだ。ちようどその頃、同じ囲碁クラブの会員である自宅の近所の方から「謡もいいよ！」と勧められて、観世流初心読本(上・中・下)を学び、つづき謡曲会に参加した。そのような訳で、謡曲は始めてまだ15年の初心者である。

それでも最近では、お能を鑑賞し、能作品の原点(平家物語・源氏物語等)を学び、友人たちとは謡蹟巡り。そして何より健

康のためと考えて、大きな声、深い呼吸で謡うことに努めている。また、復曲能等にも興味があり、令和2年には「阿古屋松」を学び、昨年には「箱崎」を勉強した。緑内障を患って視力が弱く、いつまで続けることができるか自信はないが、あと10年は謡曲を人生の友としたいと思っている。

「当麻」をめぐる

宝生流 半田 龍男

「老尼が、くすんだ董色の被風を着て、杖をつき、橋掛りに現れた。真っ白な御高祖頭巾の合い間から、灰色の眼鼻を少しばかり覗かせているのだが、それが、何かが化した様な妙な印象を与え……」小林秀雄が『無常という事』の中に梅若万三郎の当麻について書いた「当麻」の一節である。高校の教科書に載っていたが、よく理解できぬまま何十年もたった。

今回、「当麻」の謡を謡うことになり、それに当たってこの書を読み返し、また中将姫伝説を扱った折口信夫の『死者の書』を読んだ。これらを読む中で、日本人の宗教観について改めて考えさせられた。日本には一神教という「神」はなく、周囲の

あらゆるもの、人を含む動物や植物、果ては石ころに至るまでが、大自然という有機体の一要素として存在する。この世界観そのものが、神なのではないかと思う。

さらに小林秀雄の文章に「肉体の動きに則って観念の動きを修正するがいい、前者の動きは後者の動きより遙かに微妙に深淵だから、彼はそう言っているのだ。」という文章がある。能楽は、見たことのない人に説明を求められても、納得できる説明はほとんどできない。あらずじだけ聞いても面白くもない。要するに舞台の上の肉体、肉声でしか感じられないのだ。日本の文化には、形から入るといふ特徴がある。能楽はもちろん、茶道、華道、禅、また歌舞伎など、意味はともかく、まずは身体で覚え、その中に本質を捉えようとする。それは主観的に体得しようという考え方である。

おそらく西欧には、このような考え方はない。主観的な見方は否定される。西欧ではキリスト教という一神教の世界で各個人が神と対峙し、神という絶対の倫理に対して各個人が存在している。そのため個人を客観視し、また世界を客観視する習慣が身についている。そこに科学



的工業的發展があつた。

一方日本では、人は主観的に捉えられる仲間内のみ個人が存在する。だから人々は、仲間内を見回して自分の位置づけを見つけ、空気を読みながら義理と人情の世界に生きる。しかし表向きこの世界は否定されてお

り、小学校から客観性を身につけるよう教育される。ここに日本人の生きづらさがある。今の政治的経済的な日本の行き詰まりの原因は、こんなところにもあるように思う。我々は無意識のうちに押さえ込まれているこの「価値観」がもう一つあることを、良い悪いではなく客観的に捉え直す必要があると思う。

謡曲を謡い続けて

四十余年

喜多流 高木 邦雄

私が謡曲に出会うきっかけとなったのは、職場の上司から「今度、東京の能楽師に来ていただいて謡曲の稽古会を始めるので、参加しないか」と、半ば強制的に誘われたことでした。先生は喜多流の粟谷能夫師で、会場は横浜市内の各区の地区センターでした。

なつた四十年前まで続きました。その間百五十番の曲を稽古し、舞台で上演されるほとんどの曲は稽古したように思います。稽古の期間は四十年を超え、稽古仲間も当初のメンバーはほとんど鬼籍に入ってしまった。途中から参加した方々も色々な事情で稽古会から離れて行き、直近の十年余は私と十年前に参加した女性との二人だけでした。しかし、粟谷先生はこの四十余年間一度も休むことなく厳しく教えていただきました。この厳しさに耐えられず脱落した方々もおられます。

振り返ってみますと、当初のメンバーの方々と、舞台のゆかりの場所を訪う旅行会が楽しい思い出となっています。訪れた場所は、青森県の善知鳥神社、琵琶湖の竹生島、京都嵯峨野の野の宮神社や賀茂神社等々で、ゆかりの土地の宿でゆかりの曲を謡うという、至福の時間を得られました。

素謡や連吟を謡わせていただいています。また、最近では謡曲の主人公にまつわる小説を読むことが楽しみの一つとなっています。例えば「源氏物語」「平家物語」や義経及び木曾義仲に関する小説です。これにより、その時代の背景が把握でき、世阿弥などの能作者の思いに迫れるのではないかと思っています。

私にとって謡曲は一生涯の趣味であり、健康寿命を延ばす手立ての一つとも思っています。最近では知人や友人に「謡曲を始めませんか？」と誘いかけています。最近では、良い返事が得られないのですが、特に男性の方々の意欲の無さは驚くばかりです。能の奥深さや、日本文化に占める貴重な分野の一つであることを訴えて、仲間を増やしたいと思っています。

出会いに感謝

金春流 設楽 友理子

今から30年近く前に、鎌倉宮の薪能を観る機会がありました。能楽の知識はほとんどゼロに近い私でしたが、その場の空気感になんとも言えない感動を覚えたのを思い出します。

子育ても一段落して、先の楽しみに能を観るための手がかりになればと、仕舞を習ってみたりと思いつきました。何のツテも持たない私でしたが、たまたま久良岐能舞台の能楽教室の募集を見つけて思い切って事務所

久良岐会と私

金剛流 三村 芽久美

に電話を入れ、金春流の守屋泰利先生のクラスに入れていただくことができました。クラスには多くの先輩方がいらして少々気おくれしたのですが、3年間通い通すことができました。後

また、守屋先生の先輩にあられる櫻間金記先生より、守屋先生の一周忌追善に春巳会のメンバーも出ては、とお誘いいただき、思いがけず追善の舞台にも皆で出させていただくという本当にありがたい機会をいただきました。それを縁に、鎌倉の長谷川邸の能舞台で月2回金記先生にお稽古をしていただくことになり、年々覚えが悪くなって教えがいがないことと、先生には申し訳ない状態なのですが、今日まで続けています。

ある。時折、能の稽古をしてい
ると言うのと、習い事としてはか
なり珍しくとられるが、稽古を
始めたきっかけは20代初め、た
またま見た県の広報である。紙
面の募集欄で磯子の久良岐能楽
堂が五流能楽教室を開催、受講
者募集とあるのを目にし、日本
の伝統文化を気軽に体験できる
のか、それならば、という軽い
気持ちからであった。金剛流を
選んだ理由も、知らない流派
だったことと、ダイヤモンドと
いう意味を持つ金剛という響き
に惹かれたことによる。

当初、会員の中で最年少で
あった私は、皆さんからとても
可愛がってもらった。最初に名
前をちゃん付けで呼ばれて以
来、50代になった今でも呼ばれ
方は変わらず、何となくこそば
ゆい気がしなくもない。しかし
ながら、その居心地の良さと、
稽古熱心な先生と多趣味で個性
的なお仲間と囲まれて、稽古に
行くうちに、よくわからないな
がらも能の魅力に引き込まれ
て、気づけば30年経っていたと
いうところである。

京都旅行を兼ねて久良岐会で参
加したこと、さらには、私の2
人の子供が子方として舞台上に立
ち、私のほうが子供よりも緊張
したことなど、その他にも思い
出深い出来事がたくさんある。
嗚呼、なんと素敵なお会なのだろ
う。その楽しさたるや、筆舌に
尽くしがたい。

さて、冒頭の30周年の会だが、
国立能楽堂の舞台でプロの能楽
師の地頭で仕舞を舞えるという
機会を得られたのは、何ものに
も代えがたい経験である。演目
は「羽衣」クセ、キリを選ん
だ。これは、舞台である三保の
松原の光景がとても美しく何度
か足を運んだ思い出のある場所
であることや、伸一・真知子両
先生が能で舞われた曲で、印象
深く好きな曲ということからの
選曲である。舞の出来に関して
は別として、区切りの大きな会
に思い入れのあるものを舞えて
よかったと思っている。

こうして振り返ってみると、
私にとって久良岐会と稽古は人
生の傍らにいつも寄り添ってい
るもので、いつの間にか無くて
はならない存在となっていたの
である。非日常な能の世界は、
私の日々の生活に彩りを与えて
くれている。

能との出会い

下掛宝生流 松井 尚子

長い歴史と伝統を持つ能は、
限りなく研ぎ澄まされた究極の
舞台です。歴史の中の物語、あ
の世とこの世、緊張感と程よい
心地よさ、時空を超えた異次元
に誘われるようです。私にとつ
て能楽は、子どもの頃から新春
のテレビで見ても意味もわから
ず、ただ日本の伝統芸能と認識
する程度でした。

日舞のお稽古や歌舞伎鑑賞の
折、様々な演目が能からきてい
ることを知って関心はありまし
た。敷居が高く、身近には感
じられませんでした。能を知る
には、何かお稽古ができればと
思い、仕舞・謡・囃子などの稽
古に通える場所を探していた時
知人の紹介で下掛宝生流・藤田
先生に入門させていただき、謡
の世界へ。過去に失語症を患っ
た私には、とても良い稽古にな
り、いつの間にか10年になりま
した。藤田先生のお稽古では丁
寧な指導をしていただき、教室
仲間の皆様にも恵まれて続ける
ことができました。

ことがありましたが、謡を習い
始めて横浜能楽堂へ行った時、
木の香りと神聖な空気に感動し
ました。毎春秋には、久良岐能
楽堂にて教室の発表会がありま
す。素謡・連吟・独吟等、とて
も勉強になる楽しい会です。

また、藤田先生の師匠で昨年
人間国宝に認定されました下掛
宝生流家元・宝生欣哉先生のお
稽古場へ、教室の皆様と共に
伺いして一緒にお稽古したこと
や、欣哉先生のお舞台を鑑賞し
に出かけたことなど、多くの思
い出があります。

謡を稽古することで、難しい
と思っていた内容が少しは理解
できるようになり、能舞台鑑賞
もより楽しめるようになりまし
た。能楽堂では、テレビで見
るとは違って、五感を働かせ、
その日の自分の感性に触れると
ころだけを好きなように味わう
ことができます。ある意味とて
も贅沢な芸能と感じます。そし
て、奥深く限りなく想像力を豊
かにしてくれます。

謡を習い始めてから、能楽を
身近に感じるようになり、旅行
の折には物語になった名所旧跡
へ行ったり、また友人のお祝い
の集まりには小謡を披露したり
しております。これからも日常
に能楽を感じ、楽しみ、日々の
稽古に精進いたします。

入会のご案内

横浜能楽連盟では、常時会員を募集しております。
会員の方で、同門・同社中にまだ入会されていない方が
おられましたら、ぜひ入会をお勧めください。個人
でも団体でも受け付けております。入会希望の方は、
ホームページまたは事務局へご連絡ください。



能楽堂だより

令和6年度の公演案内

令和6年4月、休館期間中の活動のひとつとして、ランドマークプラザ5階に、「OTABISHO 横浜能楽堂」をオープンします。

能・狂言に馴染みのなかった方たちが通りすがりにちよつと覗いていただける気軽さで、古典芸能を知っていただける場です。*入場無料

能・狂言に関連する展示、講座などを開催するほか、オリジナル商品なども販売します。

横浜能楽堂から坂道を下りていくとたどり着くのが横浜ランドマークタワー。休館中は山を下りて、街に参ります!!そんな思いを、神社の祭礼で使われる御旅所(おたびしよ)になぞらえ、仮拠点「OTABISHO」と名付けました。

休館中も、公演・ワークショップは開催します。

休館中は、「つながり・つながる」をコンセプトに横浜市内各所で、能・狂言の公演、各種ワークショップ、レクチャーなどを開催します。

現在決定している今年度の公演は次の通りです。

OTABISHO 横浜能楽堂
オープニングパフォーマンス

4月14日(日)午後1時開演
会場 ランドマークプラザ一階・サカタのタネガーデンスクエア

「三番二ノ三番叟」茂山千之丞・野村万之丞
観覧無料

「ランドマーク狂言」

5月16日(木)午後7時開演
会場 ランドマークホール

ミニレクチャー 野村万之丞
狂言「蝸牛」(和泉流) 野村万蔵

全席自由 二千円(当日二千五百円)
チケット発売 3月25日(月) 正午から

カンフェティ ☎0120-1240-540

「横浜狂言堂―みどりアートパーク編―」

6月9日(日)午後2時開演
会場 みどりアートパーク

お話 茂山千之丞
狂言「蚊相撲」(大蔵流) 茂山千五郎

狂言「仏師」(大蔵流) 茂山 茂
全席指定 二千二百円 チケット発売中

カンフェティ ☎0120-1240-540

日程・内容等が変更になる場合がございます。
最新の情報は、横浜能楽堂ホームページをご確認ください。

◆編集後記◆

令和6年は、新年早々能登半島地震や飛行機事故という悲惨な幕開けを迎えました。犠牲者の方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された方々にも心よりお見舞いを申し上げます。ことに北陸金沢は、「謡が空から降ってくる」と言われるほど謡曲に馴染みの深い土地です。被害は比較的少なかったものの、一日も早い復興を願わずにはられません。

さて、横浜能楽連盟も今年度は様々な変化に対応しなければならぬ年になりそうです。高齢化等による会員数の減少を少しでも食い止めるために、連盟執行部が抱える課題は多く、巻頭言でも馬場会長が述べているように、各流派数名の理事だけで対処できることには限界があります。そこで、会員の皆様お一人お一人がほんの少しでも危機感を共有し、例えば同じ社中の未会員に声をかけていただくなど、連盟の存続へのご協力を、ぜひお願いいたします。
最後になりますが、馬場会長10年間お疲れ様でした。いつ

も『幽玄』にすばらしい巻頭言を書いてくださり、ありがとうございました。(F・Y)

*イラスト・鈴木幸江(観世流)



横浜能楽連盟連絡先

◎事務局 倉藤
TEL
〇四五―八三五―二三六一

◎連盟後援行事

「第38回神奈川県宝生流謡曲大会」4月28日(日)久良岐能舞台/第15回「横浜喜多会能楽大会」6月23日(日)久良岐能舞台/
「横浜宝生流連合会第37回謡曲大会」8月24日(土)予定・久良岐能舞台/
第25回「横浜金剛会謡曲と仕舞のつどい」8月24日(土)川崎能楽堂